ぶんごおおのし 豊後大野市

総括会議 ハピカム ミライデザイン会議

大分合同新聞社が、次代を担う若手リーダーと一緒に地域の未来を考えるミライデザイン会議「ハピカム」第15弾豊後大野市編が5月30日、同市役所などで行われた。「1次産業」「観光」「産創交流」の3分科会での話し合いを経て開かれた総括会議では、各分科会で出された「ミライキーワード」を基に豊後大野市の未来について議論をさらに深めた。同市は「大分の野菜畑」と称するほど優れた農産物を産出し、ジオパーク認定の観光資源も豊富にある。参加者は全員、持っている素材の良さを認識しているが、それをどう市民全員で共有して市外に発信していくかが課題として挙がった。総括会議では、この課題を克服するために、人と人、地域と人、情報と市外の人などあらゆるものを“つなぐ”仕組みの必要性が指摘され、行政任せではなく小さくても民間主導のプラットホームづくりから始めようと認識を共有。新しいことを始めると批判を受けることもあるが、殻を破って前に進むことの重要性でも一致した。参加者はこの日の出会いをきっかけとして新しいつながりを生み、新しい豊後大野市を創造していくことを誓い合った。

■ウェブ http://www.oita-press.co.jp
■スマートフォン http://www.oita-press.co.jp/h-come/

主催／大分合同新聞社 共催／豊後大野市 豊後大野市商工会
協賛／国立大学法人 大分大学 他大分銀行 日本たばこ産業㈱西本支店 ぶんご大野 里の旅公社 稲積水中鉢乳洞

今の満足より未来の満足を

まず来てもらってPR

帆足 分科会の代表から分科会の議論内容やキーワードについて説明してもらいたいと思います。

堀 コミュニティーというキーワードは、私のような新規就農者がスムーズに定住して農業で生計を立てる流れがもっと充実すれば、就農者が増えていくのではという意見から決まりました。実際、津高さん（穀・1次産業分科会）の所にも農業をしたいという人が来るが、スタートするのは難しい現状があります。地域の方と県外から来た方を結び付ける何かがないかとか、農業従事者と新規就農者をつなげるものがないかとか、移住者がスムーズになんでいく方法がないかという話から、コミュニティーとつなぐ方法を充実すれば移住者や就農者が増えるのではと、まとまりました。

角田 「ついでに」という言葉だけだとネガティブに聞こえますが、地元の人と話をすると「豊後大野はいい所だ、ろうんな方に来てもらいたい」とよく言われますんだ。現実はそこまで人が来ていない。まずは来てもらうことが大事で、一番じゃなくてもいいんじゃないかと。温布院や阿蘇に行ったついでに、まず来てもらうことでお土産も売れるし、いろんなPRもできる。そこから始めないと結び付かないのだろうということから、このキーワードになりました。みんな地元が好きでPRしたいけど、まだまだ知名度が低い。県や地区を越え、まずは来てもらって活気あるまちにするのが一番いいと思います。観光は外からお金を入れないと長続きしません。地元の物を外で売り、外のお金を中に入れる。まずは一歩を踏み出すために「ついでに」で話がまとまりました。

岩切 キーワード「殻を破って前へ」は、とても苦悩して導き出しました。今年合併10周年の節目ですが、地区の壁を破れていない部分がある。その壁を破ろうと合併した意味がありません。水がきれい、農産物もいい、人が優しくて、みんな現状に満足しているので新しいことをしない。でも、それは自己満足なんですね。子どもたちが20年後住んで生きていけるのかを考えているのか。新しいことはいろいろ考えているけど、一緒にやりましょうとなると「あんた先にやっちゃん、ようまくいったら手伝うわ」と言われる。その殻を破らないと何も始まらないということで、このキーワードになりました。

今日をスタートにする

帆足 アドバイザーに分科会で浮き上がった課題や可能性をお聞きしたい思います。

安部 コミュニティーに入っていく時に、地元の有力者のような人を介すと溶け込みやすいという話が、フェイスブックのようで、農業型のコミュニティーが今の最新型のコミュニティーなのかなと感じました。コミュニティーが支えないと農業は発展しないという議論でした。

那賀 分科会メンバーはそれぞれ、観光のいところや問題を持っていて、何とかしないといけないと考えているという印象でした。ただ、未来に対してのイメージがまだ持てていなくて、豊後大野市はどんな未来に進むべきなのかがまとまっていないのかなと感じました。なので、今日の会議が貴重な場。今日で何か答えを出すのは難しいかもしれませんが、スタートにすることで新たな未来を考える。いいきっかけになったのではないかと思います。

松野 メンバーそれぞれ違ったバックグラウンドや仕事を持っているが、豊後大野市が好きでどうしたらいいのかと共通点。問題点を共有することで共通点が出て、何もないから逆に何でもやれる、ポテンシャルはあるという話になりました。自分たちの良さと課題をきちんと認識して、どうつなげていくかを考えないといけないが、市の未来を考えて、良さを結び付ける、それを生かして前に進んでいくという認識を共有できたと思います。

帆足 ここまでの話で川田先生いかがでしょうか。

川田 分科会のテーマは別ですが、課題は同じだと認識しました。一つは、豊後大野にいるものだけくさんあるが、替さんが認識していない、生かせていないことが多い。今あるものの価値をまずあらためて考え直し高めていくことが論点だったかなと。二つ目の共通点は、地域に価値を見いだして新しい風を吹き込んでくれる外部の人の活動をどう支援していくかという課題です。外の人がうまくコミュニティーに溶け込むのが難しい。同じ課題を地域の若い後継者も抱えていると感じました。既存のやり方ではたちゆかない、新しいことをすると地域コミュニティーに受け入れてもらえないと感じている人が多いのかなと。外から来た大学や若い人は、思いが共通するので連携していろんな取り組みができると思います。もう一つは、人と情報発信の拠点づくり。人と人をつないで、そこから情報をどう発信するかという仕組みをどうつくるのか。分野ごとの横のつながり、旧町村間のつながり、人のつながり、観光客と産業従事者とのつながりなどと個別に考えるのではなく、一緒に考える必要があります。今日そのアイデアが出ればと感じました。

市にあるもの全部ジオ

帆足 私も各分科会の議論が関連していると感じました。魅力的な素材や資源をつなぎ、外に発信していくのが課題です。ジオパークは全体をつなぐキーワードになると思いますが、里の旅公社の後藤さん、ジオパークの説明をお願いします。

後藤（野太郎・観光分科会） 直訳すると大地の公園という意味で、自然と人の生活を学んで楽しんでいく場所になります。特徴的な大地があるからこそ育まれてきた人々や歴史、文化も含まれ、固い岩だけじゃなくて豊後大野市にあるものは全部ジオパークだと捉えています。

帆足 ジオパークは「ついでに」利用できるものでしょうか。

角田 来る人にもよると思いますが、だったらいの人がジオパークだといえば興味など他の所を移りげるのじゃないかと思います。外の人に来てもらうには、何か、例えば体験やスポーツ、食とか付加価値を付けてPRをしていくべきだと思います。ジオパークだけで来てくれるのか考えた時、もう一つ何かを結び付けなくてはと思います。

帆足 ジオパークと食という観点で岩切さんいかがですか。

岩切 豊後大野市はジオパークを活用できていませんね。ジオガイドや観光誘致に取り組んでいますが、食の部分で全く足りないのではと思います。自然と人がジオの根本なら、人は食べ物がないと生きていけないという部分で、これだけ産物がある。それがなぜできるのかを考えたとき、自然が素晴らしいというストーリーが十分あります。それに付随した郷土料理もあるので、うまく活用すれば観光・食・ジオが一つにつながる。市民みんなが理解してPRできるようになればいいと思います。

帆足 農業の観点からジオパークをどう見ていますか。

堀 今説明してもらってって、そういうことなのかと知りました。ジオパークの言葉は知っていますけど内容や意味を知らない人も多いんじゃないかなと。活用の仕方もいろんな産業の方と話して取り組まないと、認定されただけではんがどっと集まったりはしないと思うんですね。僕は農かふ者いるんで知らないことも多いんですが、僕が知らないということは宣伝が足りてないということかと。森さん（健太郎・産創交流分科会）がやっている巡威（めぐるくわ）も知らなかったんです。知らないということはまだまだ可能性があるというか、いい物があっても伝え方で変わってくるので、食もうなげてもらえたらなと思います。

また来たいと思う企画

帆足 巡威について説明してもらえますか。

森 豊後大野市内にある4蔵が同じ日に蔵開きをして、試飲や特別なセットの販売がありました。お酒というよりつまみなので、市内の食品会社や道の駅さんにも協力してもらってお酒とおつまみを楽しんでもらいました。4蔵を巡ることで市全体を回ることになるので、市にまた来たいと思ってもらえる企画にしたい。また市内の人でも知らない人がいるから、地元の人向けに認知度が高まる取り組みを今後もしていきたいと考えています。

帆足 巡威と前浜を結び付ける連携ができませんか。

角田 2日になれば当然宿泊ができます。観光もスポーツ大会も結構1日で終わるんです。一番お金を落としてくれるのは滞在型、それが駄目なら経食だけかな。今後、夜曜上料理を食べてもらって、次の日に蔵を巡るツアーができたら非常にいいんじゃないかと思いました。

帆足 野菜ソムリエの視点から今の話に絡めるところはありますか。

後藤（むつみ・観光分科会） 私もジオパークだけでは、と思っていたのです。ジオと食とお酒とジビエなど全部つなげてパッケージにするのがいいんじゃないかと思ってます。野菜ソムリエが屋台を出したり、イベントも取り入れて一つのパッケージにしたらどうでしょうか。

帆足 道の駅はジオパークや巡威とどう連携できますか。

和田（猛・観光分科会） 地元の素材で作った商品にジオの認定マークを付けて扱って、お土産にしてもらうのが一つです。豊後大野市になる前から清川の観光地のことは宣伝していましたが、他の町村のことは全くといっていほど分からなかった。ジオをきっかけに知って PRする必要があるし、今は足りていません。ことしジオに関連した酒を蔵さんが造ってくれたので5駅で販売しています。巡蔵にもつながっているし、巡威で訪れた人が道の駅や周辺に寄ってくれるなど広がっていけばいいなと思います。

帆足 ジビエはどうでしょう。

岩切 ジビエは有害鳥獣対策で捕った肉の行き場がないということで商品開発しました。ジビエの商品開発をしながら一石二鳥で地域の素材を発信していきたいと思っています。「猪肉（しし肉）のサムライ煮」をつくりました。日本酒をベースに使っていますが、なぜ日本酒にしたかというと市内には4社の酒蔵があるから。元の肉が豊後大野の肉なので、せっかくなので、巡威で食べてもらって、みんなが一緒に良くなり、笑顔になればいいのではと。

帆足 松野さん、これまでの話で何かビジネスチャンスにつながる部分があるでしょうか。

松野 豊後大野の基幹は農業で、どう事業化するか、飛躍していくかで、地域ならではこだわった高付加価値の加工品などを売っていくかつ、外に対して出していく、地域の良さを知ってもらうとともに、外の人がどう感じるかを理解しながら進めていくという形が考えられます。

観光／都手リーダー
Hideyuki Sumida
角田英之 さん
豊後大野市三重町、46歳。ホテルますの井代表取締役。自然豊かでスポーツ施設も充実している市内で「スポーツホテルますの井」を運営している。

1次産業／若手リーダー
Shota Hori
堀彰太 さん
兵庫県出身、41歳。教育分野のサービス業を経て37歳から大分県で農業研修、2014年に独立し、豊後大野市でピーマンとスイートピーを生産。

産創交流／アドバイザー
Hiroko Matsuno
松野寛子 さん
別府市出身、大分市在住。29歳。大分ベンチャーキャピタル企業支援部でプロマネジャー。2008年大分銀行入行。食べる物に気を付けている。

1次産業／アドバイザー
Takehiro Abe
安部武洋 さん
トキヤMD経済部食品MD課ふるさと バイヤー。大分市出身、42歳。1996年トキハ入社。97年食品配属。わさだタウンを経て2013年から現職。

意志ある少人数から始めよう

目立つ人はたたかれる

帆足 市内に道の駅が五つあり、県内でも多い地域ですが、道の駅が地域づくりの拠点ということについて川田先生いかがですか。

川田 民間が主体となって運営を興すだけではなく、地域づくりの担い手を育てる仕組みは、これから非常に期待されるところで、道の駅がやっているのは面白い取り組みだと思いました。こういった仕組みが広がっていけばいいなと。人と地域をつなぐ役割を替さんが求めていて、人の横渡しを誰が担うのかが課題になっています。これまでは行政が担っていたが、歴史的なしがらみで疲弊りであったりします。行政は横のつながりをつくるのは不得手なので、これからは民間やそれに代わる地域の組織が担っていく必要があります。可能性がある組織が道の駅であったり、里の旅公社だと感じました。

総合アドバイザー
Nahoko Kawata
川田菜穂子 さん
京都府出身、大分市在住。37歳。大分大学教育福祉科学部准教授。専門は住民学。地域の特性を生かした居住環境・コミュニティー再編の研究に取り組む。

帆足 分科会代表の替さんに、これをやってみようという決意表明をいただきたいと思います。

堀 まず農業の初心者なんで経営をしっかりして、「農業は楽しい、大分県に来たら」と言えたらいいと思っています。そうなれるようにいろんな産業の方や行政と一緒にしていくことはたくさんある。地域が活性化しないと、そこにある産業が伸びない。全体で取り組むことに参加したり、協力したり、情報を集めたりしていきたいなと思っています。

角田 店をやっている立場で考えると、豊後大野は危機的状況になるのではと考えています。できるのは大手の店はかりで地元にお金が落ちない。人口は減る、子どもは外に出るで、お金が外に取られるはかり。早く食い止めないといけない、でっとり早いのが外からお金を入れること。その仕組みを早くつくらないと大変なことになると思っます。大きいカテゴリーで考えるとなかなか難ないけど、今日の会議で、2日にわたって巡威をやるなどいろんなヒントがあったので、まずは一つずつやってみて、とにかく一歩前に進むことが大切だと感じました。

岩切 これからの目標として、地元の素材を活用した商品をどんどんつくり、そこにストーリーを載せてPRしていきたい。その商品で食語りをしていきたいと思っています。観光は食と買い物も必要で、どれが欠けても面白くない。伸び代ばっかりの豊後大野市なので大変楽しみにしています。これからは良くなることしかない。希望を持って頑張っていきます。

帆足 川田先生、豊後大野の未来について提言を。

川田 たくさんの素材があって、頑張っている事業者さんがいて、光るものがたくさんある。ただそれぞれを結び付けるつながりが弱くて、それはすべてのものをつなぐ仕組みの問題だったりとか、新しく地域に来た人と今居る人との結び付きも考えないといけないという課題が挙がりました。大きな組織や行政の大きな仕組みは必要ないかと。そういった地域の拠点やプラットホームは、小さなネットワークが広がっていくものだと思っています。その意味で、今日はいろんな立場の方が集まって、本音でいろんな話をできたことが一つの大きな成果です。分科会の中で、替さん課題や現状把握はできていたんですけど、なかなか未来に対するイメージが描けないということこそ共通の課題だったかと思うんですね。ただ、替さんが共通して思っていることということは、非常にいいものを持っている豊後大野は、その資源を良くすること、今あるものの価値を見いだして、さらにいいものにすることで、これからの暮らし や産業がより質の高いものになります。それが地域全体に潤いをもたらして、若い人や子どもたちが住みたいまち、訪れたいまちになっていくのかなと思います。今日できた結び付きが大きな取り組みになってほしいです。

常識破る斬新な発想を

帆足 分科会、総括会議を通して豊後大野市の多様な魅力が明らかになったのではないかと思います。それをどう生かすのかは、ここに集まった替さんのエネルギーと常識にとらわれない斬新な発想ではないかと思っています。やはり外からの視点も重要ですので、本日アドバイザーを務めていただいた替さんに今後も地域づくりへの協力をお願いしていくといのではないでしょうか。アドバイザーの替さん、いかがですか。（川田、安部、那賀、松野）うなずく。

帆足 ありがとうございます。地域づくりは1段上れば風景が変わり、半歩踏み出せば風向きが変わると言われています。替さんは動き始めている方ばかりです。本日のミライデザイン会議が、さらに1段上って半歩踏み出すきっかけになればと思いです。替さんのご協力に感謝します。本日はありがとうございました。

総合コーディネーター
Tomonari Hoashi
帆足朋成
1991年入社。経済部、日田支社、政治部、文化部、文化科学部を経て報道部長。48歳。豊後大野の多様な魅力をつないで総合力を高め、全国に発信してほしいです。

「1次産業」分科会まとめ

豊後大野市にとって農業は基幹産業であるが、就農人口の減少や耕作放棄地の拡大など課題がある。新規就農支援をいろいろしているが、一方で、熱意があっても続けていくことが難しい状況もある。その中で、新規就農者が続けて続けて農業をしてもらうにはどうしたらいいか話し合った。例えばインキュベーションファームでは、行政が丁寧に住居や地域への紹介をしてくれている。長く続けるには地域のコミュニティーにとけ込む工夫が必要となるという指摘から、ミライキーワードを「コミュニティー」とした。今は運よくコミュニティーに結び付けてくれる人に出会えればいいが、仕組みとしてはない。コミュニティーに溶け込める仕組みができれば、多くの就農者が長く住み続けるのではないか、その順待も込めてこのキーワードとした。そういう仕組みの中に地元住民と触れ合える機会を設けることも必要との意見もあった。

“ミライキーワード”
コミュニティー

「観光」分科会まとめ

豊後大野の観光の現状と課題を挙げてもらった。現状では、知名度が低いことと、豊富な食材やジオパークなど個々には良いものがたくさんあるのに、それを十分に生かし切れていないということ。また、情報発信力が弱く、市外や県外へのアピールが足りていないとの声が出た。どういう観光を目指すべきか議論し、ミライキーワードは「ついでに」になった。別府や湯布院、黒川に宿泊した人が、ついでに豊後大野に足を延ばしてもらえるような観光地を目指したらいいのでは、との思いを込めた。旅行者が豊後大野を巡る中で、「豊後大野は外せない」と言ってもらえる地域にしていけたらいい。具体的な提興策として、ジオ体験や食、川下りや農村体験などを、里の旅公社と民間が協力してパッケージで売り出せば、強力な観光のツールとなるのではないかとの意見でまとまった。

“ミライキーワード”
ついでに

「産創交流」分科会まとめ

まず豊後大野の良さと課題を挙げた。挙がれるものは水、空気、食べ物、人の温かさ。一方で課題は、今がいいから心地よくて満足している、人口減少や過疎化が進んでいること。今後は、子どもたちがここで暮らしたいと思えるまちをつくり、もっとPRして販路を広げ、人を呼び込まないといけないという意見が出た。同時に、地元の人に地元のことを知ってもらう必要がある。今は自分たちの現状に気付く機会も少ない。まだ旧引町2村の隔たりがあり、一つの市になりきれていないのではないか。キーワードは「殻を破って前へ」となった。現状の課題を克服するためには、人と人、過去と現在、1次産業と販路など、いろんなものをつなぐ必要があり、つないだ先に破る、突破するという意味を込めてこのキーワードとなったと、まちを見つめ直して自分のことと考える、そしてそれぞれの良さを結び付け、殻を破って未来に進んでいけばいかとまとまった。

“ミライキーワード”
殻を破って前へ

これまでのハピカム開催地／平成23年度 宇佐市（10月）津久見市（3月） 平成24年度 九重町（6月）日出町（9月）国東市（12月）臼杵市（3月） 平成25年度 竹田市（6月）日田市（9月）中津市（11月）東京（1月）姫島村（3月） 平成26年度 杵築市（6月）別府市（9月）佐伯市（12月）玖珠町（3月） 平成27年度 豊後大野市（5月）